

教育研究業績書

2018年9月1日

月 _____ 日現在

氏名 浜畑 圭吾

枚中 _____ 枚目 _____

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年 月	発行所、発表 雑誌又は発表 学会等の名称	概 要	編者・著者 名（共著の場 合のみ記入）	該当 頁数
(著書) 3件 『太平記』	共	平成19年	思文閣出版	龍谷大学大宮図書館寫字臺文庫蔵本は『太平記』の諸本の中でも特異な本文を持つことで知られる天正本系統に一本として、既に高橋貞一氏によって紹介されているが、本文はまだ出版されておらず、研究も進んでいない。そこでまず、龍谷大学本の調査と、巻一から巻二まで（以降欠巻のため）の本文を、同系統である天正本、野尻本、義輝本と比較、考察した。天正本、野尻本はそれぞれ調査に赴き、比較箇所を確認した。その結果天正本系統の中でも義輝本に最も近いことを指摘し、解	加美宏	全 P 779 。 P 768 までは影 印、 P 769 ～ P 779 まで
『平家物語生成考』	単	平成26年	思文閣出版	平成21年、龍谷大学に提出した学位請求論文「読み本系平家物語の生成に関する研究」を基に、加筆修正を加えたもの。読み本系平家物語の生成基盤を明らかにし、それが物語の生成にどのように関わっているのかを考察した。		
『高野文学夜話』	共	平成27年	セルバ出版	下西忠氏との共著。高野山に関係のある文学作品や芸能などのあらすじと、解説を施したもの。	下西忠	2. 15 . 21. 22. 2 4. 25 . 26. 30話
(学術論文) 24件 ①「章綱物語と増位寺－延慶本平家物語生成考－」	単	平成17年 11月	思文閣出版	延慶本と長門本における増位寺の薬師靈驗譚である章綱物語と、平康頼の「卒塔婆流」に例話として挙げられている石塔寺の記述に注目し、『播州増位山随願寺集記』等の史料から、平安末期から鎌倉初期にかけて隆盛であった、阿育王信仰がその背景にあると論じた。		P 179 ～ 204
②「延慶本平家物語における「燈台鬼説話」」	単	平成18年 2月	龍谷大学『国文学論叢』	延慶本平家物語第一末廿五「迦留大臣之事」は、「燈台鬼説話」と呼ばれるものであり、「孝養」の説話とする『宝物集』に依拠した延慶本は、藤原成親・成経父子の例話としているのに対して、長門本や『源平盛衰記』は、俊寛・有王主従の例話としていることを検証した。さらに延慶本は「孝養」というモチーフで、本話と例話を繋げており、更に、長門本や『源平盛衰記』のような改変は行なわず、結末の異なる例話を示すことで、本話の悲哀を一層高めていると論じた。		P 15 ～31
③「平家物語「観賢僧正説話」考－『高野物語』と長門本・南都異本の関係－」	単	平成18年 7月	『中世軍記の展望台』和泉	長門本と南都異本に共通する文言が、『高野物語』の本文と一致することを手掛かりに、『高野物語』の「老僧と		461 頁～ 474

④「龍谷大学図書館蔵『太平記』の研究」	共	平成18年11月	『龍谷大学佛教文化研究所紀要』第45集	小重」という設定を、長門本と南都異本の共通祖本が「老僧と維盛」に改め、「観賢僧正説話」を取り込んだと ^{論じた} 龍谷大学佛教文化研究所指定研究「龍谷大学図書館蔵『太平記』の研究」(代表大取一馬氏)の一部として掲載。『太平記』の天正本の一本である龍谷大学所蔵本の特質を論じた。『太平記』諸本の中でも特異な本文を持つとされる天正本系統の中で、龍谷大学 ^{本は善賢本に異なり、^{論じた}}	大取一馬	頁 P 17～ 24
⑤「長門本平家物語の慈念僧正による真済教化説話」	単	平成19年2月	『佛教文学』第31輯	平家物語の殆どの伝本が、後鳥羽天皇即位の際、先例として挙げる「惟喬・惟仁親王位争い説話」において、長門本のみが惟仁親王の祈禱師恵亮の壇所に「平等坊」という特定の坊を設定していることに注目した。長門本はそのすぐ後に、「平等坊」と呼ばれることで知られる慈念僧正による「真済教化説話」を配しており、恵亮の壇所が、後の慈念僧正を意識したものであること、つまりは後日譚から発生した設定であることを論じた。またそうした説話配置が、長門本の注釈的な態度によるものとし、傍証として長門本のいくつかの独自記述が『古今和歌集』の古注釈と一致することを指摘した。		P1～ 12
⑥「南都異本平家物語「維盛那智参詣記事」の編集意図」	単	平成19年9月	『軍記物語の窓』第3集・和泉書院	従来研究の進んでいなかった平家物語の伝本南都異本の特異性を明らかにしたもの。南都異本は維盛が那智を参詣する場面に那智関係の文献を用いて独自記事を施し、維盛救済を目的とする本文を形成したと論じた。		P87 ～ 104
⑦「「狐めかし」と「つねめかし」一読み本系平家物語の生成に関する注釈一」	単	平成20年2月	『学苑』第47号	延慶本平家物語の「狐メカシ」は長門本と同文であるが他には用例が無く、南都本が「ツネメカシ」としている。「狐メカシ」は延慶本において孤例であり、他に用例も見あたらない特異な語である。しかし南都異本が同箇所を「ツネメカシ」とし、「ツネ」に見消をして「今」としていることに注目し、「狐メカシ」の「キ」が落ちて、「ツネメカシ」となったものを現存南都本の編者が「今」と訂正したと指摘した。さらに、これが語り本ではよりはっきりとした否定語である「しかるべからず」へと変遷していく過程を明		P170 ～ 173
⑧「延慶本『平家物語』第六末廿三「六代御前高野熊野へ詣給事」の生成」	単	平成20年12月	『中世の文学と思想』・新典社	。平家が壇ノ浦で滅亡した後、嫡流である清盛の曾孫六代御前は、文覚の働きによって一度は助命された。その後、六代御前は父維盛と祖父重盛の追善のために、高野山を経て熊野三山へと向かう。本稿では、この六代御前による高野熊野参詣記事で、延慶本が施した改変の跡を手掛かりに、延慶本生成の背景について考察した。その結果延慶本は平康頼著といわれる仏教説話集『宝物集』を基にして加筆していることを指摘し、その方法を明らかにした。六代御前が、父維盛は出家を遂げているのだから救済されるはずだという主旨のことを述べた際に、延慶本は『宝物集』の中から出家に関する記述を抜き出し、六代のセリフに加えている。そしてさらに、出家に際し必要な菩提心の重要性を説いた記述をも抜き		P227 ～ 246

<p>⑨「長門本平家物語の「三鈷投擲説話」—『源平盛衰記』との比較から—」</p>	<p>単</p>	<p>平成21年3月</p>	<p>『古典文藝論叢』第1号</p>	<p>長門本平家物語の特異な「三鈷投擲説話」に注目し、その生成について考察したもの。「三鈷投擲説話」自体は平家物語諸本で繁簡の差はあるものが見られるものだが、長門本のそれは記事も多く特異な内容である。そこで本稿では高野山圏に伝承される中古・中世の三鈷投擲伝承の展開を確認し、特異な表現が発生する過程を明らかにした。長門本本文生成の背景を明らかに</p>	<p>P47 ~61</p>
<p>⑩「西光廻地藏安置説話の生成」</p>	<p>単</p>	<p>平成23年5月</p>	<p>『唱導文学研究』第八集・三弥井書店</p>	<p>『源平盛衰記』の独自記事である「西光廻地藏安置説話」について考察したもの。鹿ヶ谷事件で処刑された西光は、平家物語諸本では救済されない存在として描かれているが、『源平盛衰記』のみが地藏菩薩による救済を図っている点に注目した。その際、『源平盛衰記』の地藏菩薩は「六地藏」であり、従来これが六体の地藏と考えられていたが、本稿では一柱六面の石塔であることを論証した。また、『源平盛衰記』には地藏菩薩に関する独自記事が多く、同書の特徴として指摘した。地藏菩薩は地獄に堕ちた者でも救うという仏であり、西光を救済するという同説話の問題の解明は、『源平盛衰記』の性格の一端を明らかにすることに繋がると論じた。『源平盛衰記』は独自の記事が多く見えるが、そのひとつひとつの基盤や生成背景は具体的に考察されるまでには至っておらず、本</p>	<p>P132 ~156</p>
<p>⑪「西光と地藏菩薩—神宮文庫本『沙石集』の生成—」</p>	<p>単</p>	<p>平成23年10月</p>	<p>『典籍と資料』・思文閣出版</p>	<p>三重県神宮文庫に蔵されている『沙石集』はこれまで影印などで出版されたことがなく、翻刻本文を一部確認できるのみであった。本論はその独自記事をとりあげ、生成について論じたもの。西光が「五条坊門」に地藏を造像したという他に同話の見られないものであるが、『源平盛衰記』に類話がある。神宮文庫に調査に赴き、原本を確認したところ、当該説話は前後の説話と繋がりがあり、信心が足りない者は地藏でも救済できないということの例話であったことを明らかにした。また、「五条坊門」に造像したとするのは、室町中期の地藏信仰の隆盛期の壬生寺（五条坊門）の活動が背景にあると論じた。さらにこれを、『源平盛衰記』から近世六地藏伝承へと至るその</p>	<p>P145 ~168</p>
<p>⑫「『源平盛衰記』「髑髏尼物語」の展開」</p>	<p>単</p>	<p>平成24年12月</p>	<p>『軍記物語の窓』第四集・和泉書院</p>	<p>関西軍記物語研究会編。『源平盛衰記』「髑髏尼物語」の展開として掲載。『源平盛衰記』の髑髏尼物語が先行の平家物語を基にしてどのように展開していったのかということ論じたもの。延慶本が最も古態を残しており、そこから長門本は親子の別離の物語へと展開、『源平盛衰記』は重衡一家救済の物語へと展開したと論じた。その根拠として、本来いないはずの重衡の子を設定し、妻（髑髏尼）がこの若君と重衡の後世を弔う記述となっていること、重衡の死と若君の死の場面で地藏菩薩が関与している独自記述があることなどをあげた。また、『源平盛衰記』独自の配置が維盛との対比を意識しているとし、新たに『源平盛衰記』が加えた、維盛を意識した文言を</p>	<p>P156 ~186</p>

⑬「『源平盛衰記』「長光寺縁起」の生成」	単	平成25年4月	『國語と国文学』平成25年4月号	『源平盛衰記』では重衡が東下りの途中に近江国長光寺に参詣しており、さらにそこで長光寺の縁起が語られている。これは『源平盛衰記』の独自記事であるが、これまでその生成基盤などは考察されてこなかった。そこで本稿では聖徳太子伝を手掛かりに、同縁起が本来長光寺のものではなく、同じ近江国の「懷堂」の創建伝承に手を加えたものであることを明らかにした。さらに、東下りの途中にこれを配する理由について、維盛と重衡の対比であるとし、『源平盛衰記』は重衡を救済へ延久四年(1072)に、伊勢の齋宮で発生した狐射殺事件の経緯と、その後古記録・文学作品での事件記事引用方法の展開を検討したもの。この事件はその後、治承二年の狐射殺事件の先例とされただけでなく、『愚管抄』では後三条天皇の器を表す説話として、『古事談』では源隆綱の才智を示すものとして、利用されていったが、本稿ではその際の増補や改変の方法を明らかに兵庫県神戸市所在の願成寺に残された二つの縁起の成り立ちを考察し、願成寺が平家物語の世界を受けながら、法然の高弟・住蓮を関与させるだけでなく、地藏信仰も加えて、救済の道筋をつけていく様子を明らかにしたもの。	P57 ~69
⑭「「延久四年狐射殺事件」考」	単	平成26年3月	『朱』（伏見稲荷大社）57号		P117 ~132
⑮「願成寺をめぐる二つの縁起」	単	平成26年6月	『中世寺社の空間・テキスト・技芸「寺社圏」のパースペクティヴ』・アジア游学17大取一馬編『日本文学とその周辺』・思文閣出版		P105 ~114
⑯「『源平盛衰記』と聖徳太子伝一卷第十「守屋成二啄木鳥一事」と巻第二十一「聖徳太子椋木」を中心に」	単	平成26年9月		『源平盛衰記』の独自記事であり、また一字下げ記事でもある、啄木鳥説話と椋木説話について、その生成過程を考察したもの。いずれも法隆寺僧頭真の流れを汲む文献を下敷きにしたと考えられ、『源平盛衰記』が太子信仰を担った中世律僧の文化圏で生成された高等学校教科書に採用されている「忠度の都落ち」について、『千載集』入集の問題、平家物語の配列の問題などを考察し、前後の流れとは切り離し、ひとつの説話として読める可能性を検討。群書類従本『安元御賀記』において「ほこりか」な人々とされる平重衡と藤原実宗の描写について検討し、同書においてこの2人が象徴的に描かれていることを明らかにした。	P105 ~114
⑰「後期中等教育における国語教材の研究(1) —『平家物語』「忠度の都落ち」の理解を深める視点から—」	共	平成27年3月	『高野山大学論叢』50巻		第三章
⑱「「ほこりか」な人々—群書類従本『安元御賀記』の人物造型—」	単	平成28年2月	『古典文藝論叢』8号	下西忠・鈴木徳男	
⑲「群書類従本『安元御賀記』の成立」	単	平成28年2月	『國文學論叢』第61輯	『安元御賀記』の群書類従本を定家本と比較し、その独自記述を取り上げ、群書類従本の方向性について明らかにした。群書類従本は清盛、重盛、維盛の三代を栄花の中心として強調し、定家本を再構成したと論じた。高等学校教科書に採用されている評論「水の東西」(山崎正和)をとりあげて、古典に於ける水の表現を検討し、安元二年三月四日から六日にかけて催された後白河院の御賀の先例として白河院の康和御賀が主に取り上げられるが、鳥羽院の仁平御賀も参考にされていることを論じたもの。	P80 ~90
⑳「後期中等教育における国語教材の研究(2) —山崎正和「水の東西」—」	共	平成28年2月	『高野山大学論叢』51巻		P82 ~97
㉑「安元御賀と故実—『玉葉』における仁平御賀の記事を中心に—」	単	平成29年2月	『國文學論叢』第62輯	高野山大学論叢「水の東西」(山崎正和)をとりあげて、古典に於ける水の表現を検討し、安元二年三月四日から六日にかけて催された後白河院の御賀の先例として白河院の康和御賀が主に取り上げられるが、鳥羽院の仁平御賀も参考にされていることを論じたもの。	P17 ~33
㉒「後期中等教育における国語教材の研究(3) —『土佐日記』「帰京」の語法と表現—」	共	平成29年2月	『高野山大学論叢』52巻		P41 ~57
㉓「『源平盛衰記』「阿育王即位説話」の再検討」	単	平成29年11月	『軍記物語の窓』第5集・和泉書院	『源平盛衰記』における阿育王即位記事は従来仏典とは遠いもの、『盛衰記』编者による創作も多く含まれるものとされてきたが、構成や表現の再検討から、おもしろいものに近いものである	P17 ~30
					P111 ~132

②「『源平盛衰記』烏帽子折物語の成立過程」	単	平成30年5月	『言語文化の中世』・和泉書院	『源平盛衰記』頼朝挙兵譚における烏帽子折物語の役割について論じたもの。七騎落ち伝承や安達盛長の関与を通して頼朝の予祝の物語となっている	P157 ～ 182
(その他) 4件 ①平家物語研究展望	単	平成21年3月	『軍記と語り物』第45号	2006年10月から2007年9月にかけて出版された平家物語に関する著書、論文、その他資料を取り上げ、研究状況を概観したもの。	P 95 ～ 104
②『平家物語大事典』	共	平成22年11月		大津雄一氏・日下力氏・佐伯真一氏・櫻井陽子氏編。昭和53年発行『平家物語研究事典』以来の平家物語研究の総合事典。依頼項目は「軽大臣」「藤原章綱」「一の橋」「円覚寺」「老蘇森」「愛宕」「唐橋」「志賀」「篠原」「勢田」「増位寺」「比良山」「遍照寺」「法界寺」。	14項目
③「「むざん」の理由」	単	平成27年10月	廣田鑑賞会能小冊子	金剛流能楽師廣田幸稔師の定期会に於いて、能く実盛の解説を担当した際に執筆したもの。斎藤実盛の動向を、保元・平治・平家物語を中心に解説した。	P 5 ～ 7
④「『天正高野治乱記』六本対観表（一）」	共	平成29年2月	『高野山大学論叢』52巻	和歌山県粉河町在住曾和俊次氏所蔵『天正高野治乱記』を翻刻し、高野山大学所蔵の同書五本と比較したもの。	土居夏樹、 榊原啓優、 高柳健太郎、 木下智雄 P 3 1～ 5 9

※著書、学術論文、その他の別で列記してください。枠内の()の位置は分量に応じて変更してください。

学会等および社会における主な活動		浜畑圭吾
《学会》		
龍谷大学国文学会	会員	
佛教文学会	会員 委員（2018年～）	
関西軍記物語研究会	会員 世話人（2018年～）	
軍記・語り物研究会	会員 運営委員（2009年～）	
中世文学会	会員	
説話文学会	会員	
唱導文学研究会	会員	
《社会活動》		
龍谷大学RECコミュニティー カレッジ大阪	講師	
龍谷大学高大連携室	高大連携担当講師	
兵庫大学やさしい文学講座	講師	
NPO法人いづみ健老大学	講師	
京都市生涯学習センター	講師	
廣田鑑賞会能	解説	
高野山大学連続講座	講師	
放送大学	講師	
高野町等連携講座高野山学	講師	